

美しく生きたい

—魂という袋—

望月優子 著



ホームライブラリー

望月 優子 著
美しく生きたい
——魂という袋——

©



ホームライブラリー

17

定価 340 円

初版発行 1971年 3月25日

発行者 長 宗 泰 造
印刷所 株式会社 厚徳社

発 行 所

株式会社 国 土 社

112 東京都文京区目白台 1-17-6

振替東京 90631 電話 943-3721

校印廃止

美しく生きたい

——魂という袋——

望 月 優 子 著

国 土 社

序にかえて——娘の詩から

お母様が女優だと知ったのは終戦後

お母様の手作りのオーバーを着て

(そのオーバーも兵隊毛布だったな)

一時間もする長い道を

毎日毎日通ったときだった

お母様はゲートルをつぎあてたスカートをはいていたっけ

お母様の戦争の残骸の利用法は本当に成功だったといえるけど

あのオーバーとスカートは 着るにはすこしおもすぎたわ

それでも長いあいだ

そんなものをつぎはぎして

あの一時間の道のりを歩いたつけ

あの道は長すぎたよ

お母様 私は四歳だったもの

十年前の私の誕生日に、娘からこんな詩をプレゼントされました。いろいろなとき、いろいろな人からプレゼントを頂きましたが、この詩くらい私の心に残ったものはありません。娘から手渡されて、一読して、強いショックのようなものを自分の心に感じました。私はそのとき、思わず泣きさえたのです。いまでもこの詩を読み返すと、あのときと同じ感動が心の中によみがえります。

けれど、この詩が、なぜこれほどまでに強く私の心を揺さぶるのだろうか、と考えてみると、奇妙なことにそれがわからないのです。

ただこれだけは言えます。この詩を読むと、私がこれまで、女として、妻として、

母親として、そして、女優としてたどってきた道すがら、ちようどいままで歩いて来た道をふり返って眺めるように、はるかに見渡せるような気持ちになるのです。そして雑多な追憶が、映画のコマ落としのように、きれぎれに、目まぐるしく押し寄せて来ます。

たんなる感傷——そうかもしれません。しかし、私には、過ぎ去った美しい日々、式の追懷癖は、もともとあまりありません。私の古い記憶のフィルムに写っている数数の場面は、なんらかの意味で私を大きく揺り動かし、次の場面へむけて私自身を突き出すことになった、そうした体験や事件の場面なのです。年齢からいって人生の半ばを過ぎたいま、現在の自分がこれらの体験の集積の上にいるのだ、これらの体験が、いまの私を形づくってきたのだと感じます。そしてこれらの体験を、それぞれの局面で、私自身は充分に生かしきれなかったにもせよ、それについて娘に、娘の世代に語り継いでおきたいという欲求をつよく覚えるのです。また、それが母親としての、また女としての「義務」だとも思えるのです。

こんな気持ちをもつようになったのは、娘がこの詩を私にくれたときからです。あの

ときの感動が、この文章を書くキツカケでもあり、また裏づけでもあるのです。

最近、新聞やテレビで、よく「断絶」という言葉が使われています。そして、それはいわゆる戦前・戦中派と、戦後世代の間にきわだってみられるとのこと。私流に解釈すれば、「断絶」とはもうお互いの心の中に入っていけなくなった状態ということだろうと思います。だとすれば、これ以上におそろしく、悲しいことはありません。相手の心を信頼するからこそ、人間も社会も存在するのではないのでしょうか。もしほんとうに「断絶」などということが起こり得るとしたら、その瞬間に、人間は存在しなくなるのではないのでしょうか。

私は「断絶」などという言葉は信じません。けれど、もしそんな言葉で表現しなければならぬ傾向や風潮があるとすれば、それはなくさなければならぬと思います。それにはどうすればいいかは、それぞれの場合で異なるでしょう。ただ私の場合は、一人の女として語りかけること、それしかないと思います。私がこれから書くようにしているのは、私のこれまでの半生記です。私はこれを、母親としてでも女優としてでもなく、まさに一人の女として書くかと思っています。母と娘との対話は、それ

が対話であるためには、母と娘という関係のもう一つ前にさかのぼって、つまり女と女の關係としてなされなければならないと思います。

女と女との対話であれば、それは特定の母と娘とをこえて、広く社会的な対話となり得るでしょう。ですから、この本は、正しくいえば「対話」ではありません。私の氣持としては、これは対話のはじまりとして、まず私のほうから口を切った、そういうつもりです。私の娘だけでなく、私の娘の世代の人たちへあてた、私の世代からのメッセージの役目をはたしてくれるだろう、という期待もあります。もしこの中に、人生を考えるうえでの、何かのヒントを見つけていただければ幸いです。

美しく生きたい*もくじ

序にかえて——娘の詩から

.....

3

三人の母たち 11

女優志願 25

義父の死と父母との再会 42

暗い時代のはじまり 60

いくさの中の青春 71

生と死のはざままで 90

戦争の中の愛 105

戦争の後の生命 118

映画こそ大衆のもの 135

映画のなかで考える 145

ほんとうの平和を——広島と沖縄 160

政治と芸術の交叉 171

私たちの未来 183

魂という袋 187

あとがき



映画「姉妹」(家城巳代治)の母親役

三人の母たち

十四年ばかり前に、私は生まれてはじめて本を一冊書きました。「生きて愛して演技して」というタイトルですが、その本のトビラにこんな文句を書きました。

人の愛 愛 愛……

そのみが人間の最大の仕事

そのみが人間の出来にくい仕事

そして、いまも同じことを考えています。

——愛って何だろう……？

この問いは、たぶん私の心に最初に芽生えた「哲学的」な問いであったと思います。以来、私の思考は、何十年たった今日まで、同じ一つの言葉、「愛」を中心にして回転しているように思われます。

しかし、これはなにも私が「哲学的」な瞑想めいそうにふけるタイプの人であるからではなく、私の人生の出発点そのものに問題があるといえるでしょう。

で、まず、その出発点をお話したいと思います。

私の人生の記憶は、私が数え歳四つのときからはじまります。ある日、私はよそ行きの緋の銘仙を着せられて、東京の下谷竹町の、とある棟割長屋のきれいに拭きこんだ格子戸の前に立っていました。誰が、どうやってそこへ私を連れて来たのか、ということは覚えていません。そんなことはありやうがないのですが、なぜかそのとき、私はたった一人で、その格子戸の前に立ったという気さえます。私の前には見知らぬ他人の家があり、私はどこともわからぬ所からやって来て、その家に入るべく立ち止まった、それが私の人生の最初だったのだ、そういう感じなのです。

その家（といっても棟割長屋の一軒ですが）の主人は里見末次郎といました。奥さんの名はこゝといました。そして、その翌日から、この二人は、私のとうちゃんとかあちゃん

になりました。

ずっとあと、少女時代になってから知ったことですが、私は、ある下宿屋の娘と、そこに下宿していたある男の人との間にできた子供だったのです。何かの事情（たぶん、身分がちがうとかいった理由からだったのでしょう）、この生みの母と父とは結婚することができず、私は里子に出されました。私がもらわれていった先の里見家では、その少し前に、ちょうど私と同じ年頃の娘を亡くしたばかりでした。子供が亡くなったのが動機で、夫婦の仲がとかくうまくいかなくなっていたようです。そのむずかしい愛情生活の中へ、私はほんと放り込まれたわけでした。

あとになって人から聞かされた話ですが、この当時、新しいとうちゃんとかあちゃんの間柄は、ほとんど破綻にひんしていたようです。そして、私という子供をもつことによって、こわれかけた愛情を、なんとかたてなおそうとしていたように思われます。

私は二人からとてもかわいがられました。とうちゃん、かあちゃん、と呼ぶことにもすぐに慣れました。新しい父母のもとで、私はほんとうに幸福でした。いまでも、そばに誰もいないとき、小さい声で「とうちゃん、かあちゃん」と言ってみるがあります。すると、ジンと眼頭が熱くなるのです。

私は両親のどちらからも愛されましたが、とうちゃんとかあちゃんの間は、そうかんたんにはもとにもどらなかつたようです。私がもらわれてまもなく、とうちゃんはある人を傷つけたかどで、一年間入獄することになりました。なんでも、その人はかあちゃんが好きだった人で、それを知った父が怒りのあまり傷つけたということだったようです。

母は何回か獄中の父に面会に行きました。その都度、私は母のネンネコ半纏ばんてんに背負われて行きました。もちろん、私はとくに歩けたので、そんな必要はなかつたのですが、乳呑児ちのみこでないと面会できないというような規定でもあったのでしよう、おかげで私は、四つにもなつて、ネンネコ半纏で背負ってもらうという、望外な恩典にあずかることができました。

そんなわけで、私は里子に出されたうえ、もらわれた先の片親と離れて暮らすという、かなり変則的な育ち方をしたのですが、それで苦しいとか、いやな思いをしたという記憶はまったくありません。そういう家庭ですから、当然貧しく、かあちゃんは毎日せつせとマツチはりや袋作りの内職をしていました。かあちゃんといえ、まず内職をしている姿を思い浮かべるほどです。そうやって得たとぼしい賃金の中から、生活費や私の養育費や夫の差入れの費用をひねり出していたのでしょう。

いまでも忘れられないことは、毎朝かならず卵を一つずつ私に食べさせてくれたことで

す。食いしんぼうだった私は、とりわけ卵が大好きでした。いり卵、ゆで卵、おとし卵、ご飯にかける生卵……、毎朝の食膳に、きょうはなんの卵がでくるだろうと、胸をわくわくさせて向かったものです。

当時の貧しい家計から考えて、子供に毎日卵を食べさせることは、かなりの負担だったと思います。卵は毎朝の食膳にいつも一つきりで、それは私が喜んで食べてしまい、かあちゃんも卵を食べるのを、ついぞ私は見た記憶がありません。

この一事からだけでも、母が貰^{もら}い子の私にずいぶん優しくしてくれたことがわかります。ほんとうにそれは「献身的」な愛情だったと言っていいと思うのです。私は、里子の悲しみ、なんぞにひたるひまもなく、のうのうとその愛情を満喫していました。

しかし、いまになって考えてみると、このころ母はおそらく必死の思いで生きていたのです。夫と恋人との間に板ばさみになって、どっちの道をとろうかと迷いつづけていたのだろうと思うのです。その心の惑いを、私に愛情をうちこむことで、なんとかしてまぎらそうとしていたのかもしれない。しかし、私たち親子の間が、それによって親密になればなるだけ、いっそうつらさもつのつたでしょう。

父が出獄するほんの二、三日前のことでした。夜、寢床に入っている私のところへ母がや